

# プランクトンと妖怪の共通性

琵琶湖博物館 主任学芸員 楠岡 泰

## 今までにない切り口

皆様、プランクトンってご存知ですか？ 水の中の小さな生き物を連想する方が多いのではないかと思います。しかし、定義の上ではプランクトンとは浮遊生物のことで、水の中を漂って生活している生物のことです。ですから本来大きさには関係なく、かさの直径1m以上、重さ200kgもあるエチゼンクラゲも立派なプランクトンということになります。逆に同じミジンコのなかまでも水草にくっついているものは浮遊生物ではなく、附着生物と呼ばれ、正確にはプランクトンではありません。

ただ、琵琶湖で考えた場合、最大のプランクトンでも1cm程度ですし、ちょっと風が強いと、水草の表面に附着した生物ががさがさ、水の中を漂っていることがありますので、プランクトンは水の中の小さな生き物というイメージは間違えではありません。

2004年12月から2005年4月まで琵琶湖博物館で「ミクロの世界を探検しよう プランクトンの不思議」と題するプラン

クトンに関するギャラリー展（特別料金をいただかない小規模な企画展）を実施いたしました。

このギャラリー展を作るにあたり、今までにない切り口でプランクトンを紹介できないかと考えていたところ、ふと思いつきました。プランクトンと妖怪の形に共通性があるのではないかと。そこで、「プランクトンの世界に見る妖怪」というコーナーを作りました。

これまでもプランクトンの観察会や体験学習でオナガミジンコなどのミジンコのなかまは頭の中央に大きな複眼をもち、まるでつ



オナガミジンコ



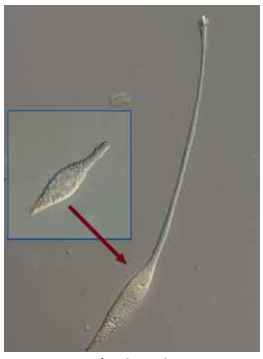
一つ目小僧

目小僧のようだと、という話はしておりました。ほかの妖怪やプランクトンにも形の共通性がある場合があるのではないかと調べてみました。

## ラクリマリアはろくろ首

まず思いついたのが、ソウリムシなどの繊毛虫のなかまのラクリマリアです。ラクリマリアは200μm(0.2mm)程度の大きさで、繊毛虫としては大きい部類に入ります。体の先の方が細く突出しており、その先端に口があります。口と体の間(首にあたる部分)に伸縮性があり、首を一気に伸ばすことができます。これはまさに妖怪のろくろ首です。

通常水草などに附着する藻類(藻のなかま)の茂みに隠れ、首だけを四方に伸ばし、餌を探します。首は体の4~5倍は伸び



ラクリマリア

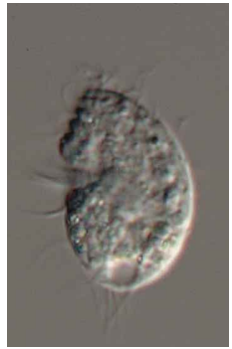


ろくろ首

ますので、体を隠したまま広い範囲で餌を探すことができます。顕微鏡でヨシの表面を覗いていると時タイトミリスをすつと小さくしたような白い糸状のものが、穴からするすると伸びたり、縮んだりしているのを見つけることができます。ガラス針で穴の周辺をほじくると、ラクリマリアの本体を見つけることができます。

また、破れようちんの妖怪、不落々々にそっくりなのが繊毛虫のゴルボダです。楕円形の体の側面に口があり、まるで舌のような板状の繊毛列が口のわきにあり、それを動かして細菌などを集めて食べます。

このほかに、スナワムシと本だたら、ツリガネムシのなかまのカルケシウムと人面樹などさまざまなプランクトンと妖怪に類似した形が見られました。



ゴルボダ



不落々々

妖怪絵3点とも大久保義彦氏画 大久保氏のサイト「妖怪尽くし」 <http://www10.ocn.ne.jp/~hiko/index.htm>

## 先祖がプランクトンであつたころの記憶?

私は人間に害をおよぼさない妖怪であれば、実在してほしいという気持ちを持っています。しかし、自然科学を学ぶ者としては、妖怪は人間の想像の産物だと考えざるをえません。

では、どうして妖怪とプランクトンが共通の形をしているのかという疑問が浮かびます。プランクトンの形は長い進化の過程で偶然と必然が重なって出来上がったきたものと、考えられます。昔の人がプランクトンを見て妖怪を想像したとは考えにくいですが、プランクトンと妖怪の形が似ているのは偶然と云ってしまうは偶然かもしれません。

しかし、生まれた時から人に飼育されたサルでも、教えられなくてもへビに対しては警戒行動をとるそうです。これは本能的な行動だといわれますが、同じように、人間にも遠い先祖がプランクトンであつたころの記憶がどこかに残っていて、ある形に対して恐怖心を抱くという考えは、あまりにもロマンティスト過ぎますのでしつつか。

このようなテーマは研究にするのは難しいですが、頭の片隅におきながら今後もプランクトンと付き合っていくと思います。